

都内IT企業から 最北の村「猿払村」で農業事業創出へ



藤田 旅人 (ふじた たびと)

静岡県浜松市出身。大学卒業後、都内のIT企業を経て、2021年6月から猿払村地域おこし協力隊に着任。村内にある小学校グラウンド跡地に新設されたビニールハウスで、3月～11月に行うイチゴの栽培実証を中心に、10月～2月には野菜の栽培実証にも携わる。

【猿払村の協力隊に応募した経緯】

前職は東京都内のIT企業に勤めていました。コロナ禍になり働き方も在宅勤務へと変化し、今後の生き方について考えた時に、漠然と「田舎で農業をやってみたい」気持ちが湧いてきました。この気持ちに従って前職の退職を決めた後、地域おこし協力隊について調べていく中で「smart農業で地域に根付く新規産業の創出」といった猿払村の求人を見かけました。経験を活かしつつ、農業に携われることに心を惹かれ応募。未踏の地だった猿払村まで実際に赴き面接を行い、無事着任が決まりました。

求職活動中は、全国津々浦々の募集を見ていました。そのため、日本最北の都道府県である北海道の、しかも最北の村に自分が暮らすことになるのは、猿払村の求人を見るまでは考えもしなかったのが「人生の巡り合わせは面白いな」と感じます。



2020年9月に完成した2棟のビニールハウスと休憩所

【猿払村に移住して感じること】

猿払村に来てまず驚いたことは、野生の鹿を日常的に見かけることです。他にもキツネやオオワシ等、都内では目にしない動物も多く見かけます。また、雪が積もる地域での生活も始めてだったため、雪かきや雪道の運転等、今まで経験してこなかったことも多く、何もかもが新鮮でした。

そんな東京都から最北の村への移住ではありましたが、インターネットは問題なく繋がりますし、宅配も来てくれるため、不便に感じることはほとんどありません。太陽が昇れば山紫水明な景色が心の癒しを与えてくれて、太陽が沈めば人の気配を感じない程にしんと静まるこの環境は、自分に合っていると日々実感しています。

【猿払村の課題と現在の活動】

猿払村は漁業と酪農の二大基幹産業を有しながらも、人口はゆるやかに減少を続けています。その要因の1つとして、就職先が少なく、進学で村を離れた若者が戻らない点が挙げられます。このような状況を改善していくために、若者や移住者の受け皿となるべき産業を創造し、雇用を創出することを目指し、猿払村の冷涼な気候を生かせる見込みがある、イチゴ栽培に村を挙げて取り組むことにしました。

猿払村を含む宗谷地方は、作物の栽培が盛んな地域ではありません。単に「イチゴ栽培を行いますか?」と言っても、手を挙げてくれる人は少ないでしょう。そのため「どのような条件で、どのような栽培をすれば、どれくらいの収量が見込めるのか」具体的なデータを示すために、自分たちで実証栽培を行いマニュアル化します。また、猿払村の農業に優位性を持たせるために、IoT^{*1}を活用した制御装置で栽培管理を行うことで、作業負担の軽減を図ります。これが私の携わる、猿払村の施設園芸栽培実証事業となります。



10月～2月に無加温で栽培される冬野菜

【イチゴの栽培実証事業】

猿払村の実証事業の核となるのは、春～秋に行うイチゴ栽培です。IoTから取得される環境データ、イチゴの重量や品質、葉や芽の生育の状況等、細かな項目に分けて調査を行います。これらの得られたデータから傾向を可視化し、課題を洗い出し対策を検討後、取り入れられることは翌年度の栽培で調査していきます。このようにPDCAサイクル^{※2}を回して、猿払村に最適な栽培方法を模索します。

栽培調査をベースとして、役場の課長や担当職員の方々はじめ、イチゴの専門家、時には村長や副村長にも参画していただき、今後の戦略を決めていきます。この話し合いでは、長期的戦略の他に、短期的栽培目標についても協議を行います。このような協議を経て、2023年度の目標は「儲かる農業」に決まりました。2022年度までの栽培で、夏に美味しいイチゴが収穫できることは実証できました。次の目標として、今後猿払村で就農した方が、限られた栽培面積から最大の収益を出せるように、1棟当たりの収穫量の最大化を図ります。

そのために、今まで栽培を行っていた1段の高設ベンチから、2段式の高設ベンチに改築。ベンチの改築も私たちが一から行い、パイプの切断・接続・埋め込み等、時に職人のような仕事も行います。換気扇や側窓等の自動制御を行う環境制御装置についても、導入コストの削減を目指して自作。また、養液システムも品種毎の最適な肥料濃度や灌水^{かん}量を探るため一新しました。

このような栽培調査に向けた準備も終わり、2023年3月、いよいよ今年も定植の時期がやってきました。雪の下で越冬させていたイチゴ苗を掘り出して、役場の方にも協力していただきながら、自分たちが構築した高設ベンチに定植していきます。定植された一面のイチゴ苗を見ると、準備段階の終わりを感じるのと同時に、今年度もイチゴ栽培が始まる実感が湧いてきます。読者の皆さんがこの記事を目にする頃には、無事にイチゴが実っていることを願っています。

※1 IoT
インターネットに繋ぐ技術や繋がっている状態。

※2 PDCAサイクル
業務改善や業務効率化などによって、生産向上を図るための考え方。

【野菜の栽培実証事業】

暖房使用によるイチゴの通年栽培も可能ではありますが、暖房コストや、本州の収穫期と重なることによる需給バランス等を考えると、北海道で行う冬のイチゴ栽培は、難しい面が多々あります。そこで、2棟あるうちの1棟は、9月中旬にイチゴ栽培を終了し、高設ベンチを解体、土壌の耕運・畝^{うね}立てをして、10月から2月は、無加温の冬野菜栽培実証を行います。同じビニールハウス内で、高設ベンチ栽培と土耕栽培の両方を行うことは、一般農家では中々経験しないことであり、この実証事業の一つの特徴です。

野菜栽培の実証も専門家のサポートを受け、無加温でも育てられる野菜を選択します。小松菜やホウレン草、チンゲン菜等の広く流通されている野菜の他に、ケールやスイスチャード、アイスプラントといった、あまり流通されていない野菜まで、多い年には14品種もの野菜を栽培しました。多品種栽培で、野菜毎の生育の^{しんまんいそく}違いを見られることはとても楽しく、心満足な日々を送っています。

【将来の展望】

猿払村の施設園芸栽培実証事業は、雇用の創出に向けた基盤づくりにおいて、乗り越えなければいけない課題が多々あります。その課題を一つずつ解決していき、いつかこの栽培実証事業が、猿払村を支える一つの産業となっている未来を想像すると、心が躍ります。今後販路も徐々に拡大していく予定なので、もし猿払村産のイチゴを見かけた際には、お手に取っていただきますと幸いです。



村内の小学生に向けたイチゴ摘み体験も行いました